

分科会報告 (要旨)

第一分科会 (教学部会)

座長 小倉光雄

発題 三原正資

助言 岩堀豊種・井藤太然・岩永泰賢

運営 植坂行雄・高橋謙祐

参加者 二十五名

①お題目総弘通運動を見直す―成果・問題点・展望

○運動を機会に、総代・世話人に呼びかけてから関心を示すようになり、信行会に参加したり、研修会が開かれるようになった。しかし、役員に知恵をつけてほしくないという寺院もまだ多くある。

○ご朱印帳を発行して、管内寺院間で参詣し合って交流を図り、合同信行会も開催されるようになった。

○今さらという感じがあって、運動は表だってやっていない。若干教師間で話題になってきたが、かといって新しい活動はない。従来の活動を持續するのに精一杯だ。

○参加者の減少・内容のマンネリ化の打破をめざして新しい会を作ってみるも、読経・唱題・祈禱・法話の従来のパターンで終ってしまつて、何をしたら信行なのかわからない。カリキュラムがむずかしい。

○総弘通といわなくても、日頃の活動が運動だ。家族ぐるみの参加、唱題をめざすが、その進歩はなかなかだ。

○未信徒へのアピールに、唱題行脚による教箋の配布、テレホン相談の開設、研修の場の設置、種々の結縁づくりを試みている。

○運動の主体・目標が不明。何の為にやるのかわからないから、従来のものにたよるしかない。それも持続はますます困難である。

○従来の運動や講演活動などの反省がなされているのか。この点から運動の信行会づくりは出発しなければ

らない。だから、信行とか信行会とかいっても、何

をしてよいのかさっぱりわからない。社会に生かす
なんて先の話である。抜本的に考え直す必要がある。

○総弘通運動が全体として可能な状況にあるのか。

個々の活動はあるが、それが運動の成果なのか、ど
う評価するのか、運動の基準が全くわからない。

○空声をはりあげての運動は、今までと変わりはない。

当局は伝道宗門という掛け声と活動を集計しては活
性しているというだけ。信行会の組織づくりばかり

にこだわるから、どこも苦慮しているのではないか。

教師のいる所が常に信行の場、いる所・行く所すべ
ての場を布教に活かすことが運動として大切だ。

○活動内容がマンネリとよくいうが、もう一度、この
マンネリ化ということを考え直す必要がある。日

常生活はもっとマンネリではないか。でも生きてい
るではないか。

○運動のポイントを変えてみてはどうか。

入った。

霊学と死について、新宗教は三世説に立脚した先祖供
養によって人々の心をとらえ、霊と死後生の問題をア

ピールしたのが丹波哲郎。その主張は現代の浄土教だ。

日蓮聖人は三世説に立っていることを踏まえて考えるべ
きだ。本宗の加持祈禱も人生観が変わるような学制的な

認識の体系として整備する必要がある。本宗の天皇奉悼

文は、歴史的反省と評価がなされず、昭和六年の勅額下
賜を強調する視点に問題はなかったか。

②霊界（本宗の）について

○霊界＝死後の世界は体験できない。過去の業の結果
が現在の姿であるということを認識し、過去の結縁

で法華経を聞くのであるから、行ないの継続は靈山
浄土に化生すると言いつ与える。遺文を通じて暗示す

る。
○死後の霊界があるかないかは、釈尊のたとえ話や無
記につきる。霊があるかないかという発想が問題だ。

○霊界はある、ないを超えた世界だが、心で説明でき

発題者より課題について次の提言がなされて、討議に

る。心の実態はないが、心の作用・働きがあり、身

心一如だから霊の状態は説明できるだろう。心が中心。心を信ずることから信心は出発する。

○あるかないかは、信じるか信じないかが問題。生かされているという認識が大切である。

○霊の存在に対して僧侶の答えがなくなった。死者との共感、思いやるものがなくなってきた。

○仏には働きがあることを考えると、即身成仏と年忌供養の関係が説明できる。

○その人の霊体験が左右する。遺文にも霊の存在を述べられており、霊界はあるというべきだ。ただ、あり方の言い方が問題で、注意すべき点である。

○まやかしが多く、厳しく問う必要がある。本宗では本仏に抱かれた世界観があり、身心一如の生命観から、こう信じればよいとはっきり答えることが大切である。

③ 本宗の加持祈禱・大荒行について

○さわり・あたりばかりやっていると、本当のものになり得ない。

○霊感の悪いイメージにこだわってはいないか。信心

では、曼荼羅の世界に感應できる精神の高揚が大切だ。さわり・あたりでは聖人の祈禱や祈りが見失われてしまう。

○罪業消滅には祈禱も必要。しかも命がけだ。祈禱後の題目受持にもっていかねば祈禱の成就にならない。そして救うために教化が必要である。

○根があって現象が起こる。根をとり出す教化が必要で、加持祈禱に、どのように教化していくかが加わらないところに低い評価があるのではないか。

○本宗の加持祈禱に学的体系がないから、他宗から批判されても反論できないのではないか。

○祈禱に入っていくと、聖人のそれとちがうのではないかと、悩んでしまう。

○本宗の立場を独善的に解釈してはいけない。科学的説明などなくなっているところに、一つの弱点がありはしないか。さわり・あたりは、現代人が納得できる説明が必要である。祈禱宗団といわれても、識者の批判に答えられる内容をもっていなくてはならない。

④ 天皇崩御の際の本宗の奉悼文について

○天皇に対し、『神国王御書』を拝し、日本人として素朴にも敬う念を持っている。批判はどうかと思う。

○本宗の奉悼文は、他宗のそれに比べて特異な内容である。特に勅額下賜を強調した奉悼になっているのはおかしいのではないか。国家神道に基づいた大喪の礼のあり方に問題はなかったか。天皇を法華経信仰に帰依させられなかったことは反省すべきだ。

○奉悼文はどういういきさつから成ったか。他宗から皮肉的な内容発表があったが、宗務当局に責任があり、どう対処したのか。

○奉悼文が出されてから、他宗からある時は天皇制にベツタリ、ある時は批判するという日蓮宗と批判されたが、本宗の姿勢はいつもそうだ。

○奉悼文に、教学的、時代的な問題点はなかったか。それをなぜ毎日新聞に掲載したのか。

○われわれは、仏教者として対処していかねばならない。どこでもお題目を唱える。

○敗戦で価値観が変わった。戦前曼荼羅不敬で弾圧も

あったが、戦争を讃美する行動も多かった。日蓮主義の名において国家神道に利用された。そうしたものは本宗の本流ではないことを明確にする。

要望

○今後、公的機関に発表する場合、慎重を期すること。
○大嘗祭をむかえるに当って、新憲法を遵守していくことを訴える。政教分離をはっきりさせ、日蓮宗徒の姿勢を明確にする。
(高橋謙祐)

第二分科会 (寺檀部会)

座長 小川英爾

助言者 木村勝行・菊池泰瑞

発題者 井村大祐

運営 片野博義・西片元證

参加者 十四名

第二分科会は十四名の参加者によって討議が行なわれ

た。

まず、座長の挨拶の後、参加者の簡単な自己紹介、そして座長よりスケジュール説明があり、討議に入った。

①統一テーマ「お題目総弘通運動について」の討議

助言者の木村師より、運動の経過と現状についての説明があった。すなわち、総弘通運動は護法運動・統一信行の発展したものであり、僧俗一体の本宗を作るものである。過去の運動は僧侶中心であったが、この頃では檀信徒の比重が大きくなっている。その様な傾向の中で、十五年後の開宗会を七百遠忌と同様に行なって良いのか、という話があった。

木村師の話をうけて参加各師より、次の様な意見が出た。

○総弘通運動の方向性が見えない。各寺単位においても、従来より布教教化に励んではいるが、総弘通運動との関連がわからない。

○信行会と講の問題も、講を信行会化するのには地域の特性、古い体質等が壁となり、なかなかむずかしい。

○宗門より、信行会活動を行なっている寺院に渡され

るお題目旗について、伝達式も無ければ、使い方も良くわからない。

○各管区にても、従前の統一信行を継続して行なっているところ、新たに始めたところと様々である。さらに、これだけではなく、教師が参加者の一人ひとりを取りをフォローしなければならない。

○寺の活性化が寺を軸にして、その地域に波及していくような方向の布教が望ましい。

②分科会テーマについての討議

最初、発題者の井村師より「信行会活動の活性化をばむものは何か」について、(イ)講と信行会、(ロ)新興宗教(ハ)教師の自覚、(ニ)教師像(檀信徒の見た)の四点より説明があり、アンケートの解答(会議資料より)を確認しつつ討議に入った。井村師の説明は、次の通りである。

(イ)講と信行会

講での太鼓の叩き方等は、技術的には無形文化財レベルのところもある。しかし、地域のコミュニケーションの場としての性格が強く、信仰的ではない。また、新し

いことはできない。

(ロ)新興宗教

旧来の檀家制度の上にあぐらをかき、死ねば寺に戻るという安易さが、そして教師の怠慢が、新興宗教の成長を促進させている。

(ハ)教師の自覚

昭和五十九年度の宗勢調査結果を見る限りでは、教師の自覚が全く足りないと言える。従って、信行会についても、一般の人が出席し易い日を選ぶ、会場の設定、内容等に工夫が足りないのではないかと想像できる。

(ニ)教師像

日蓮宗新聞六月二十日号の読者の声より考えれば、信徒から信頼されていない教師像が浮び上ってくる。

以上をうけて、「信行会活動の活性化をはばむ原因」について、種々意見が出た。助言者の菊池師が次のように整理された。

○講組織の問題。講は排他性が強く、信仰的というより、地域のコミュニケーション・レジャーとしての体質がある。信行会を行なっても、実態として講に

なってしまうこともある。

○檀家制度の問題。寺と檀家とのつながりが、墓・総代や世話人等の名譽職的なものため等になり、信仰以外の部分へ比重があること。また、寺院側も一応の経済的安定があり、布教意欲を減退させる可能性もある。

○住職以外の指導者がいない点。住職が兼務、あるいは多忙であったりすると、信行会が維持できない。

○教師の創意・工夫が足りない点。日程・場所を僧侶側の都合で決定したり、檀信徒へのアピール不足。

また、参加の功德・意義等を明確にできず、魅力に乏しい点がある。

○教師が多忙すぎ、せっかく寺を訪れた人の話も聞けない（日蓮宗新聞六月二十日号）。

○寺庭婦人の教育の必要性。信行会活動のみならず、寺院の活性化に家族の協力は不可欠である。

以上の意見が出され、それに対する対応として、次の様に案が出て討議を終えた。

○宣伝とフォロー。信徒・未信徒にかかわらず、参詣

するよう、寒行等を兼ねた唱題行脚からラジオなどのメディアを使う宣伝・アピールが必要である。そして、訪れた人が、再度来るようにフォローするところが重要である。

○人材バンク制度を活用したい。(西片元證)

第三分科会 (法器養成部会)

座長 新井貫厚

助言者 新聞智照・石井鍊昭・都 龍張

発題者 豊田正通

運営 原 顕彰・植田観樹

参加者 十三名

最初に統一テーマについて参加者全員の意見を聞いて問題をピックアップし、そののち分科会テーマについて討議され、熱気あふれる意見交換がなされた。

①統一テーマについての意見

最初に助言者新聞上人から、宗門運動全般についての

概略とお題目総弘通運動に至る経過が説明され、現状における問題点として、運動の認識が各教師にまで浸透していない、本宗教化活動のすべてが網羅されているものの独自の実体がない、方向性が示されていない、との指摘があった。この後、出席者それぞれの意見が順に述べられた。以下列挙する。

○運動は外へ向っての働きかけとならなければならない。

○個々人においては運動を積極的に展開している人も多いが、今このお題目総弘通運動に始まるものでもなく、以前から一環して信行活動をしていた結果にすぎない。

○教師・住職のやる姿勢が檀信徒に伝わるもので、教師の自覚・認識を促すことが大切だ。

○運動と名づける以前の教師の当然なすべき活動である。その意味で、運動が盛りあがらない原因のひとつに、教師・住職として不適確な教師がかなりいると思われる。

○各寺が裕福になり、現状に満足してしまい、先へ進

むエネルギーが失われた。

○未信徒への積極的布教がなくてはならない。外への積極的活動は内部（檀家）をも活性化させる。

○信行題目旗（欠陥品）にみるように、中央の配慮と
いうものが欠けている。

②分科会テーマ

まず発題者から、本年度第二期信行道場訓育主任としての体験を踏まえて、信行道場課業表を参考に信行道場の実態が説明され、道場生は必ず何かをつかみ、成長して出ていく。従って、今の三十五日間で充分との感想が述べられた。また、問題点として三点が指摘された。

①入場前のしつけができていない道場生が多い反面、僧道実修を充分つんだ道場生もあり、技術的な面でも意識の面でも相当の隔差がみられる。

②しつけができない師僧のもとへ道場修了後帰って行く。せっかく清浄になり、道念に燃えて修了した修了生が、さらに磨きをかけることができるか、元の黙阿弥になるかは、修了後の師僧のあり方にかかわ

る。ここに師僧自身の問題がある。

③修了後すぐに教師資格を与えてよいものか。修了後教師としての自覚が昂まって、はじめて資格を与えるべきかと考える。

以下設問に従って、討議された。

設問(1)(イ)現在の信行道場で何もかも教えるのは無理だというが（指導のあり方・カリキュラムについて）、あなたのご意見をお聞かせ下さい。

(ロ)子弟を信行道場に入れるに当たって、あなたは何を教えてほしいと望まれますか。

信行道場で修得するものは、大きく分けて法要式等のいわば外的技術的なものと、内的宗教体験の二つがあることが確認され、道場はこれをどう取り入れていくかが討論された。

○技術的な事項は講習会を設置すれば、二週間もあればもっと効率的に修得できる。道場ではここでしか味えない宗教体験をもたせ、信仰の深化をはかることが大切。強い宗教的インパクトを与えたい。その

ため、技術面は取り入れないほうがよい。

○教化活動のエネルギーは教師の信仰の深さといえよう。そのため宗教体験をもたせることは信行道場の第一の目的であることはいうまでもないが、道場を出てすぐ使える僧侶になって欲しいというのが現場の要請である。これを無視することはできない。

○入場以前において、身延山などに入つてすでに法要式・作法等に習熟している者にとっては、技術的指導の時間はレベルの低さを感じさせる。そこで高いレベルを保持すると、今度は未習熟の者にとって厳しすぎる道場となり、ついていけなくなる。このような道場生の隔差を考えると、現在の道場は、両者を折衷しており、ちょうどよいと思う。

現在の信行道場については、その他にも充実した討論が展開されたが、立正大学で子弟の教育にたずさわっている小野文琄上人から信行道場改革案が提示された。これによると、寺院子弟は大学（検定）卒業後、身延山に前期後期一年。前期四月～九月道場。後期十月～三月僧道実修。また通信教育信行道場や特別信行道場などの構

想が提案された。

この提案に対しての意見は次の通り。

○信行道場の改革は、道場のみならず、関連する宗内各方面への影響があり、即日を実現していくことは難しい。

○道場の役割りは、教化の任に当る教師を養成することにある。そのためには、宗教体験による信仰心の喚起・深化が最重要な課題である。種々の養成機関を設けて漏れない完璧さを求めることはそれなりにうなづけるが、制度の重層化は肩書・資格に振りまわされる体制を生み出す危険性もあり、現状の制度をいかに充実させるかを考えるべきだ。

○長期の養成期間は、道場に送り出す側からみて、持ちこたえられる限界を超えたものとなる。

改革案と関連して、社会的に一人前になっていない学生が、道場を出れば一人前の「お上人様」となれることは問題だとされ、教師資格を与える時期・方策とも合わせて討議された。そこで第二期信行道場については、大卒卒業後とすべき意見が多かったが、反対意見も出され

た。すなわち、寺や生活の事情で大学卒業後には道場へ入る時間のない人にとって、在学中二期道場に入れなくなることは僧侶への道を閉ざされることになる。

以上、信行道場について入場生の隔差、師僧の在り方、寺や生活の事情等々、一律に考えることのできない問題点が浮きぼりにされた。

尚、しつげに関連して、とくに宗門子弟の母親の子育てに問題があり、一般家庭以上にあまやかされた学生・道場生が多い点、深刻な状況であることが話しあわれた。

設問(2)寺の息子が僧侶になりたくないという人がいます。

在家から発心して僧侶になる人もいます。僧侶になるということはどういうことなのか、あなたの
お考えをお聞かせ下さい。

宗門子弟で寺を継ぎたくないとする理由として、次のような意見が出た。

○経済的理由による。

○師僧たる親の生き様に魅力がないため。

○僧侶と宗門に対する社会的評価が低く、コンプレッ

クスを感じるため。

○子弟の母親たる寺庭婦人に問題があり、子弟に宗門人としてのしつげ・教育がされていない。また、寺・師僧を覲る目も養われていない。

次に、在家から出家した僧侶についての意見。

○発心の純粹性を評価すべきで、これを持続し生かす
方策が検討されるべきだ。

○住職への道を開くことも大切だが、まず住職を中心とした布教体制を変えるべきで、布教の最前線に非
住職を積極的に登用することが必要。

○女性教師の活躍の場を広げるべきだ。

○住職でない在家出家者は、意識の面でも差別を受けることが多い。そのため、住職を目指す傾向が強くなり、結果的には発心時の純粹性さえも損なわれていく。

これらに対する解決法が論じられ、次のような意見が出された。

○社会的に高い評価を得るには、まず社会にいきる教師となることが第一歩である。

○子弟教育の第一段階を担う寺庭婦人自身の教育が大切。その第一歩として、寺庭婦人となった時点で、いわば住職になる時の認証式のような、宗門儀式を提唱したい。これによって、宗門としての地位を承認することとなり、寺庭婦人としての自覚も昂められ、励みにもなる。

○寺庭婦人の研修会等の教育は必要である。同時にその地位の確立・人権の擁護も大切だ。単なる家事就労者・雑用係ではないという地位の向上を宗門的に認め、また自覚をもたせ、教師中心主義の寺院運営を改めることも必要で、寺庭婦人の横のつながりを宗門に反映させ、活かせる組織造りを考えたらどうか。

○過疎地寺院の統廃合をして、過密地へ寺院を移転し、そこへ有能な在家出家者を住職として登用すればどうか。

設問(3)社会にいきる教師は、どのような教育の中から生まれて来るとお考えですか。

先に、社会的に評価される教師は、社会にいきる教師だとの意見が出たが、ここにまたお題目総弘通運動にいう「弘通」の意義も認められるとの認識がなされ、討議された。

○外へ出ることはなくても、外に開かれた寺であれば、社会にいきることはできる。

○僧侶という以前に、社会人としての意識と体験が必要である。これがないと、お上人としてたてまつられた自分しか知らず、本当の衆生教化はできない。背広の布教という態度こそ社会にいきる姿である。

○社会と遊離した「僧侶の世界」に浸っていないけない。

さまざまな意見が出たが、最後に助言者新聞上人から、次のような意見が述べられた。

社会にいきることには二通りの形式がある。①社会の宗教的ニーズに応えることのできる教師であり、寺院であること。②一般社会の市民運動や社会的行事に参加するなどの結びつきをもったり、あるいは自らその先頭に立って社会に働きかけリードできる教師・寺院で

あること。これらはいずれも、社会にいき、社会に働きかけをもつものだが、反対に閉ざされた小世界の中で前からの檀家のみを対象としている状態では、社会から取り残されるだけである。宗門がそうならないための教師養成でなくてはならない。その教師養成の方策は一朝一夕には論じられないが、まず社会を適確に見つめ、問題を指摘し探求できる教師を養成することを眼目とすべきと考える。

(植田観樹)

第四分科会 (世代別教化部会)

座長 蓮見高純

発題者 江口隆祥

助言 鎌田行学・井本学雄・太田鳳苑

運営 田島辨正・大島啓禎

参加者 十五名

①統一テーマ「お題目総弘通運動について」の意見

(1) 「今さらながら」と考える二つの問題点

①名 称 お題目総弘通は、宗是であり、目的である。

②具体性 右目的を具体化する運動の柱が見えて来ない。

③現状是認 昔からの講・信行会を続けてゆくことと同じだ。

(2) 世代別教化の取り組みの遅れ

①子や孫に信仰を相続してゆくことがむずかしい。

②未信徒の信徒化、檀徒化の広がりのある運動展開が見られない。

(3) 宗門組織が弱い

本部から末端に指令が届き動く組織にはなく、各寺の取り組みのみ。

(4) 取り組む教師の姿勢の反省

①僧俗ともに、その本分を尽す。

②宗門施策を地域・事情に合わせて、自分の運動として取り組む。

②分科会テーマについて

【発題】

発題者の江口上人より、御白坊の子供会活動等についての事例報告があった。報告は、地域の特性などの紹介の後、活動の様子を記録したビデオを流しながら行なわれた。その内容は、十三年前に始まった子供会の活動から、例会（子供主体の唱題会）の様子・寒中の毎晩行なわれる寒行・池上のお会式参加（日曜日当たる年のみ実施）・身延大本堂落慶法要への参加（昭和六十年）が紹介された。いずれも子供たちが生き生きと、しかも規律正しく修行に励み、儀式に参加し、太鼓を打ちながら姿に、江口上人の並々ならぬ指導力と苦心が感じられた。

次にビデオでは、毎年五月の連休に行なわれる「蓮久寺まつり」の様子が、詳しく放映された。これは、子供会の行事の一つとして始められた納涼大会（夜店と映画の夕べ）が「桜まつり」を経て定着したもので、今日では檀信徒の有志で構成される世話人会に、企画から当日の設営や運営のすべてを任せて、大変な盛り上がりを見せている。また、その世話人会の中から、「蓮祥会」という壮年層の会が生まれ、日常的な活動を継続的に行

なっている。

以上のビデオによる報告の後、江口上人は、子供会の問題点として、①子供の数が少なくなり先細りであること、②他のクラブ入会や部活動・受験などのため子供（特に中学生）が参加しにくくなっていることなどを挙げられた。また壮年層の活動については、一つの目的のもとに結束が固く、信行面での成果も上がっている一方、単に楽しいだけでなく教化に結びつけること、檀家を信仰活動に巻き込むこと、旧来の檀家の理解を深めることなどが課題であると指摘された。

以上の報告を踏まえ、設問に従って討議を行なった。

【設問】子供会に熱心に通って来ていたB君が中学生になった時、母親から「今あなたにとって一番大切なのは受験勉強なのだから、寺より受験よ」と言われ、それから寺に来なくなってしまいました。中・高校生・社会人へと進む子供達に、もしあなたならどう対応しますか。

○寺を会場にして会費の安い塾を開き、初めに読経唱題を必ず行なうようにした。受験勉強をむしろ利用

して教化に役立たせることも可能である。

○子供会に本当に魅力があれば、中学生になっても活動するはずである。家族ぐるみで楽しく行なえば、

親の理解も得られ子供も熱心になる。わずかの期間でも、信仰と縁を結ぶことが大切であろう。

○その魅力とは、評価されることや目的を達成する喜び、いわば「法悦」であろうか。

○今の子供は、兄弟が少ないので、家庭内で社会の模擬的体験ができない。子供会の活動では、班行動や連帯責任などを取り入れて、社会的訓練ができるようにプログラムを組むべきだ。

【設問】 A君は積極的に子供会に来ていますが、彼の父母は放任タイプで、一切寺とかかわりたくないと考えています。その父母たちに、どう布教の輪を広げるか、そのポイントをお聞かせ下さい。

○子供が喜んで参加していることを親に知らせる方法を工夫する。報告書をつくるなど、きめ細かいアフターケアが大切である。

○子供の問題は、むしろ親に問題があるからという視

点で、まず親を教化しなければいけない。

○親にも活動を呼びかけ、話し合えば、親の会を結成することもできる。

【設問】 私の寺では、幼年層や高齢層の教化のための組織づくりは進んでいます。その中間、特に壮年層に対する教化のための組織づくりが弱いので、何かアドバイス願えないでしょうか。

○寺に若い人を集め信行会を作りたく、万灯講を取り入れた。組織の目的がはっきりしているので集まりやすく、持続している。

○行事は休日主体とし、企画運営を任せることにより仲間意識を作り出す。また終了後には、平等の立場で成果や反省を話し合うことも大切である。

○寺で待つのではなく、社会に積極的に出ていき、教化を及ぼすことが必要である。 (大島啓植)

第五分科会 (教化伝道ネットワーク部会)

座長 進藤義遠

助言 伊藤如顕・貝山宣昭・小川順道
発題 龍澤泰孝・伊藤立教
運営 神谷行宏・吉本光良
記録 的場慶雅
出席 三十名

第五分科会は、教化伝道ネットワーク部会として、各種ニューメディアが開発されるなか、これを活用して寺院を活性化させ、特に中央教化センター・地域教化センターのシステム化を図り、同時にそれぞれのネットワークを作るにより、いかに現場の教化に役立たせるかについて討議を行なった。

始めに統一テーマ「社会にいかすお題目総弘通運動——みなおそう運動の実態——」についての話し合いが持たれ、その後本題に入った。以下箇条書きで要旨を記す。

①統一テーマについて

- 統一信行・護法大会等の動きが出てきた。
- 無住職寺院が多く活性化しない。

- お公式に地域住民の参加を促す。
- 先ず檀信徒教化が肝心ではないか。
- 宗務総長が代わる度に指導が替わる。
- 中味が伴っていない。
- 成果がわからないうちに過ぎてしまった。
- 教化資料として功德を説くものを作って欲しい。
- 題目旗がひどすぎる。
- 中央の思いどおりにはいかない。
- 教師の再教育が必要。
- 小手先ではない教化法が必要。
- 勸学院の講習の講師を宗務院が決めてしまう。地方の要望も聞いて欲しい。
- 一代法華から永代法華へ変えるのが難しい。
- まとめ
- より具体的でわかり易い指導マニュアルが欲しい。
- 運動の目標がハッキリとした形で伝わってこないため、教師が何をなすべきか判らない。
- 各管区各寺院における「檀信徒研修道場」「信行会」の新規開設等はその成果として評価したい。

○教師が一人ひとり祖意を体して活動すること。特に法華経お題目の功德を檀信徒に確実に伝える努力をすべきである。

○本運動は永久運動であるが、当面の十八年間という長い時間、気持を昂めながら活動の展開をして行く努力が欲しい。

② 発題

○教化の熱意は個人の信仰から出てくるもので、それ自体は組織システムでやるものではないが、一人・一寺院で考えるよりも、他の人・寺を参考に、活用することで成果が上がるはずである。

○机上プランでなく、現場に役立つ実働をする教化センターでなくてはならない。

○宗務所長が総弘通運動本部支部長、護法事務長が副支部長と決められても、現状では実働部門がない。実働の核を教化センターにしたらどうか。

(以上 伊藤師)

○現在電話やマイクを使うことは当たり前になっている。

今後ファクシミリ・パソコン通信・ワープロ等を使う伝道も当り前の世の中になると思われる。

○「てらこや」を建設し、情報布教センターとしての機能を充実させ、個々人の悩みに日蓮聖人の教えから回答を与えられるように工夫した。

○現代機器を活用して寺や教師相互の情報伝達を図る方法、寺院のネットワーク化も目指している。

(以上 龍澤師)

③ 分科会設問に対する討議

中央教化センターと地域教化センターのシステム化を図るため

(イ) 現在の二十一教化センターの全体的組織統一を、どうすればよいと思えますか。

(ロ) 未組織地域における教化センター設立を促進するには、どうすればよいと思えますか。

○中央教化センターでフォーマットを作り、地域教化センターに端末を設ける。

○人材・経費を考えると個人では難しい。

○印度学仏教学研究会で仏教用の難字を作成している
ので、二年後にはデータベースの供給ができるよう
になる。

○中央教化センターが情報を収集し、各地域センター
の教化資料が重複しないようにすればお互いに利用
できる。

○お題目総弘通運動の実践のうち、教化センターで行
なう運動方針をかかげ、各センターが実施する。

○本来教化センターは宗門の教化の中核でなければな
らない。あらゆる情報が集約され、O A 機器等に
よって地方へ流され、寺院や地域の要望に対応でき
る機構を整える。

○教化センターが未組織な地域は、それぞれの事情も
あるので一概に早期設立を望めない。

○既存のセンターが積極的に活動して行けば、未組織
地域も必ず作らざるを得なくなるのではないか。

都市型寺院と農村型寺院がそれぞれ布教を实践するうえ
で、ネットワークづくりなどニューメディアを、具体的
にどう活用すればよいと思いますか。

○地方では檀家が都市へ流出している。地方と都市の
寺が連携を取り合えば、流出した檀家にも布教がで
きる。

○夏休みなどに子供の交流をしたらどうか。

○過疎過密の寺院の橋渡し、情報提供を中央教化セン
ターでやって欲しい。

○地域的な変化に対応できるように、諸地域の今後の
予測を中央教化センターで研究して欲しい。

○地方から都市に出ている檀家に教えたいので、都市
寺院の行事を中央教化センターが把握して情報を流
して欲しい。

○金曜講話を撮影して、そのビデオテープを地方に
送って欲しい。

○中央教研会議の参加者名簿を作って欲しい。人的
ネットワークができるから。

○過疎過密にかかわらず、檀信徒が寺から遠くへ行っ
てしまっている。そういう部分で教化センターや各
寺院がネットワーク化していれば、もっと布教がで
きるのではないか。

④ 要望事項

○ 中央教化センターを早期に正式設立していただきたく。
い。

(的場慶雅)

第六分科会 (社会問題部会)

座長 渡部公容

発題者 蟹江一肇

助言者 河崎俊栄・山口裕光

運営・記録 鈴木浄元・望月兼雄

第六分科会は、十八名の参加者によって話し合われた。まず分科会テーマに入る前に、今回の第二十二回中央教化研究会議の統一テーマでもある「社会にいかすお題目 総弘通運動―みなおそう運動の実態―」として、お題目 総弘通運動の現状報告と見直し、また参加者各自の問題意識を話し合った。

はじめに発題者より、現在のお題目総弘通運動の実態と問題点が説明され、次に各参加者の現状報告と反省点

が約一時間にわたり、活発に討議された。

この討議内容は、各分科会の座長が全体会議で「まとめ」を発表しているので、ここではそれを掲げる。

〈現状〉

- 一、昔からの講中が中心となっており、そのため新たな信行会作りは難しい。
- 二、各寺によってその教化活動の内容は多岐にわたっている(万遍唱題会等)。
- 三、管内での現状(信仰体験発表、檀信徒研修道場、テレホン仏教相談、行脚等)。

〈問題点〉

- 一、教化活動の大半が宗門内教化にとどまり、未信徒教化が不充分。
- 二、信行会会員の若がえり、核となるリーダー育成の重要さが指摘される。
- 三、各寺の活動に連携がなく、組織的な運動となっていない。
- 四、古い体質を改善し、お題目総弘通運動は宗門のルネッサンスでなければならぬ。

へまとめ

このような現状の中で、今後の活発なお題目総弘通運動の展開は困難が予測されている。

その他、各種の意見が出されたが総体的にお題目総弘通運動は、各寺における守りの運動であり、対社会的（未信徒教化）な運動の欠如、宗門全体に一体感が感じられない等々、今後の宗門運動の一層の努力が望まれた。その後、短い時間であったが、人権問題が討議された。ある一例が紹介され、それに伴いアイヌ問題、逆差別問題、改姓運動等が話された。

本年の第六分科会は、「医療と日蓮聖人の教え」として、社会高齢化問題、医療問題、人権擁護問題、過疎過密問題等の社会問題に対し、一宗教者として如何に対処するかという部会であるが、今回は医療問題に焦点を当てて進めていった。医療問題には、四つの問題点が掲げられており、発言された意見は多種にわたるので、ここでは要約して紹介する。

①病名告知をされた患者に、どのような話をするか。

○病氣をもった人には、ある浄土、なる浄土、行く浄土の三つの浄土がある。

ある浄土↓事の一念三千のこと。心の中に求めている浄土。

なる浄土↓一人ひとりが個人の中に求めているもの

ではなく、世の中に求めている浄土。立

正安国と同じこと。

行く浄土↓亡くなった時に、靈山往詣する時にいく

浄土。

この三つ全てを求めていくことが大切である。

これを詳しく言うと

「病氣になった人が求めていくもの」

←

一、病氣を直したい。

・医学治療（西洋医学）

・心の中の祈り（宗教）

・意欲をもちたらず

（以上が「なる浄土」）

二、世の中は苦であり、これは逃れられないことで

ある（苦の自覚）。苦の現実をわきまえる。（「ある浄土」）

三、世の中を去る時（死ぬ時）は、靈山往詣を願っていくこと。（「いく浄土」）

人間の病いは人間である以上、身体が病めば心が病み、心が病めば身体が病む。心の面から回復していけば、身体の治療は早く良くなり、心の面で病気に打ち勝つことが基本的なことである。

○性格によって病にかかる種類が違ってくる。因果関係を心得て患者に接して行く。病むことによって新しい人生を生み出す。

○告知するということは、価値観（人の命）の問題であり、価値観をかえていく事が大切。

また、現場の医師が宗教者に対する要求として、告知された患者の悩みを如何に救うかと言うことが話された。最後に、檀信徒が素直に告知を受け入れられるような教育（教化）をしていかなければならない、という意見でまとまった。

②我々、僧侶は患者や病院に如何に関わり合っていくか。

○信頼できる医師を作ること。また患者の中には様々な立場の人がいるので、病院や家庭ではできない所に関わりをもっていく。

○高齢化に対して三つの問題点がある。

一つには、老化は病気か。人間は必ず年を取る。運動機能低下、精神機能低下の二つが挙げられるが、これは病気なのか。

二番目には、畳の上で死にたいとよく言われるが、しかし家庭で死ぬということは、家庭に大きな負担をかけることになる。それに対して我々は、家族に対してどの様な援助が必要か。家族へのサポートにどの様に対応するか。

三番目には、経済的な問題。医療費は個人負担か、国家の充実によつての負担か。中間施設では月々何万円という個人負担があるという現実を直面している。

○日蓮宗で運営できる高齢化に対する施設を作ってもらいたい。

③末期ガン患者にどの様に法話を説いたらよいか。

○患者の年齢によって法話の内容が違うのではないか。

○檀信徒には法話はできるが、寺の住職には、どの様な話をしたらいいのか。

○僧侶は美しい死に方が必要ではないか。自分の懺悔をしながら往生してはどうか。また、末期患者には死というものを自覚させていくことが大事であり、死ぬ間際にあわてふためくというのは信仰心がないことである。

④痴呆症の老人にどの様に対応するか。

○忍の一字が大切であり、反対に怒るとするのは良くない。

○痴呆症の老人を集めて法話を聞かせたい。この様な施設が望まれる。

○聞いて聞いて何度でも聞いて心を安定させていくことが大事なのではないか。また、我々や檀信徒を中心に、この様な看護の人材作りが必要である。

以上、各種様々な意見が出され、「医療と日蓮聖人の教え」という問題に対して、多角的な角度からの捉え方がいろいろと出され、我々一僧侶としても、日蓮聖人の教えの如く病人に対しても、医療に対しても生きた救済の理念を深く追求し、現代社会の求めに応えることが大事だと思われる。

最後に要望事項として、仮称「日蓮宗医療問題研究会」の発足を要望して全てを終了した。(望月兼雄)

第七分科会 (立正平和部会)

座長 古河良皓

助言者 中濃教篤・久住謙是

発題者 近江幸正・梅森寛誠

運営・記録 石田良正・白部哲應

参加者 十五名

第七分科会の立正平和部会は、第二十二回の今回から新設された部会であり、宗祖の立正安国の具現化を考え

る会であることが、座長より説明され討議に入った。

①統一テーマ「お題目総弘通運動について」

まず、久住師より、宗門のお題目総弘通運動に至るまでの、諸運動の流れと成果を上げていない現状について説明を頂き、参加者から意見を出してもらった。以下まとめると、

活動の報告

○各地区における組寺の信行会の実施。

○宗務所主催で他宗派の人に向かって市民大学講座を
している。

○運動の具体的表現としてお題目の宝塔建立。

○檀信徒研修道場の実施。

○信行題目旗の授与など。

問題点

○従来の運動の成果や反省を総括せず、総長の交代の
たびに新たな運動が行なわれるものの、進展がない。

○運動自体、具体性と宗門的な一体感が無く、自坊に
おける守りの面が多く、外部に向けての行動に欠け
ている。

○各地区においても従来運動の継承であり、新たな
取り組みが少ない。

展望

○成果を上げるべく連帯感を造り、意識を昂揚させ、
運動を定着化させる。

○管区毎に工夫をこらした運動の取り組みを考える。

○運動を盛り上げるために檀信徒側のリーダー的信徒
を養成する。

②分科会の討議内容

始めに発題者近江師より、「立正平和運動は日蓮宗の
存在理由を主張し得る唯一の教団運動」という題で、こ
の運動が立正安国という法華経の精神を具現化する運動
であることが示された。続いて、梅森師より、設問に
従って、ソ連のチェルノブイリやアメリカのスリーマイ
ル島の原発事故に見る原発の危険性と自身の原発運動
の報告がなされた。

この発題を受けて参加者から、今回は問題点をしぼる
ことなく各自の事例報告や意見を出して頂いた。

(1) 事例報告

○日蓮宗の立正平和運動は、政治的イデオロギーを越

えて核兵器廃絶、反戦争を訴えて来た運動である。

○千鳥ヶ淵墓苑での終戦記念日の戦没者の法要も意義と内容が薄れてきたので、日程と共に見直し、この行事を盛り上げなければならない。

○反原発の運動のために日本山妙法寺の僧と平和行脚や原発の前で断食したり、パンフレットを配布して活動している。

○被爆地蔵を祀り、地域の人々と子供達と法要をして、命の尊さと、平和の大切さを訴えている。

○原水爆殉難者の塔婆を建てたり、その位牌をつくって供養し、立正平和の会を作って毎月托鉢をしている。

○原発問題のない地域でも震災にあったところまで行脚して、集まってくる子供達に戦争や原爆の悲惨さを話している。

○法話の中で、食品添加物のことや、農業に侵された野菜のこと、スナック菓子の食べ過ぎでモンキーセ

ンターのサルに奇形児が多いことなど、資料を示して警告している。

○地方では、いきなり立正安国のための反原発と言っても理解されないのが、個人の罪障の問題に比して、国の罪障として示している。

○政府のODAのような海外開発援助金が、アメリカの傘下の国々の軍事費になっていることや、本宗の信者の大臣が原発推進を表明する事実に関心を示すことが必要。

○核問題は、ウラン採掘や原発稼働における核廃棄物処理などが、環境汚染と共に人の心も汚染し、原発が稼働している所などでは電力会社によりお金がバラ撒かれ勤労意識が薄れ、人間らしさをなくしている。

○現に原発が稼働している地域では反原発を訴えることは刀杖瓦石の法難を覚悟しなければならない。

○国禱会などでも個人の祈願が多く、世界平和祈願がない。日蓮宗の祈願のなかに平和の祈願文や回向文を作り、意識を上げていくことが必要。

○森林伐採のしすぎという事実を踏まえ、塔婆のことなど、限りある資源の消費の仕方を考えなければならぬ。

(2) 全体的な意見のまとめ

○立正平和運動の趣旨自体が、お題目総弘通運動であるという意識を持ち、社会に警告を与え得る宗門・平和を標榜する宗門を目指す必要がある。

○核兵器・原発・諸々の社会問題（食品添加物、水質汚染、農薬散布、森林伐採、酸性雨等）により、日常的危機の状況に人々がいることを認識させるべく啓蒙することが現代の折伏といえる。

○我々も電気を使い、排気ガスを出し、世界の資源の恩恵に浴している事実を認識し反省し、世界平和へと意識を昂めていくことが必要。

○立正平和運動が各地域と連携をとれるようにネットワークを作り、バックアップが必要。

最後に、以上のことを、ただ知識として知っているだけでそれを外へ知らしめることをしなければ、「墮地獄」

の罪を受けなければならないという意識を持たなければならないとの意見が出た。（白部哲應）

全体会議（第二日）

全体会議座長 中村潤一
副座長 豊田正通

第二日午前十時からの全体会議では、まず各分科会における討議課題の報告が、それぞれの運営・記録担当から発表され、続いて今回の統一テーマである「社会にいかすお題目総弘通運動—みなおそう運動の実態—」についての討議に入った。

はじめに、参加者の手元に配布された報告メモをもとにして、統一テーマに関する各分科会での総括（前掲各分科会報告中）が、壇上に並んだ各分科会座長から順次報告された。

ここでは、旧来の活動と総弘通運動との差異や運動展開の方向性に対する疑問、時代や社会状況への対応や宗